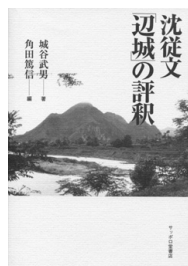


沈從文研究のための座右の書

小島 久代

城谷武男著
沈從文「辺城」の評釈



A5判 710頁
サッポロ堂書店 [4725円]

本書は沈從文の代表作「辺城」の読み解きを一字一句も疎かにせず、諸版本（二五種類）の異同を洗い出し、三十年の歳月をかけて実に丹念に書き上げられた労作である。あとがきに記されているように、本書の姉妹編として『沈從文「辺城」校勘』はすでに二〇〇五年に出版されている。もとは「辺城」校異考」として『北海学園大学学園論集』に「校勘」と「一緒に連載されていたものだが、途中から「校勘」と「評釈」をそれぞれ独立させ、「校勘」が先に出版された。本書「評釈」の出版が遅れたのは、実はその間に著者は『沈從文「蕭蕭」「阿金」「牛」の版本研究』（二〇〇六年）、『湘西——一九九六年秋冬 写真と文』（二〇〇七年）、沈從文論『沈從文研究 わたしのばあい』（二〇〇八年）の大部の書三冊を矢継ぎ早にサッポロ堂書店から刊行していたためでもある。

中国現代文学専攻者の多くは、名作「辺城」（一九三四年）を松枝茂夫の名訳で読んでいるだろうが、いざ原文に挑戦すると、これがなかなか読めない。中国語中級程度の学習者のテキストとしてはとても使えない。上級学習者あるいは大学院生のテキストとして初めて歯が立つくらいである。評者も退職前の三年をかけて「辺城」の訳読に学部・大学院の授業で取り組んだが、いざ読み始めると、著者も言うように、現代中国語の文法に適っていない語順、やたら長い文の動詞（例えば「好像」）がどこまでを賓語とするのかわかりづらい点などとともに、湘西の方言にも悩まされ、一向に前へ進めなかったことを思い出す。つまり巴金などの文章と比べると恐ろしく読み難い文章なのである。著者はその難読性の解明を文法・語彙・事象に分けて手に入る限りの工具書、例えば日

本国内で出版されていることば典^①はもとより中国出版の『漢語大詞典』、『現代漢語大詞典』の他、『現代漢語方言大詞典』及び本国の沈從文研究者の手になる劉壯翀・劉壯韜・沈從文作品中湘西方言釈義^②、糜華菱「沈從文作品中的方言民俗考釈」、李啓群「沈從文作品語言与湖南鳳凰話」と「沈從文作品民俗考釈」、沈從文『辺城』題識五種^③、及び呂叔湘主編『現代漢語八百詞』、増渕法之著『日本・中国植物名比較対照目録』など三十数種の辞典・事典・百科事典に当たり、また院生たちを動員して、インターネット検索による調査も行っている。その上、三度にわたる現地調査によって得られた作品の舞台・茶峒周辺の当時の貴重な地図の紹介によるビジュアル面での活用もされており読解を助けている。また、読解にあたっては、先人の松枝茂夫訳『辺城』（一九三八年改造社版、河出書房版、河出書房新社版）と英訳三種を各問題箇所^④に於いて引用し、訳文を比較検討して、翻訳の可否を検討しつつ、また誤訳と思われる箇所を指摘しその理由までも解明されている。更には陳訪沢さんというネイティブ（日本語文法研究者で中国の方言にも詳しい）の貴重な協力を得て、自主学习方式で毎週一回四年の歳月をかけて、文法・語彙・事象の三つの面からの分析・訳読が行われている。

本書の特徴は、なんとといっても二五種類もの版本を比較

した「辺城」校勘を基礎としている点であろう。生活書店版（一九三四年）、開明書店版（一九四三年）、一九五七年『沈從文小説選』版、百花洲文庫版（一九八一年）等々がほぼ半世紀を越えて出版されるのに伴い、その都度作者自身による修正が行われているが、この比較校勘作業によってそこに作者の政治的配慮を窺い知ることができると同時に、『国聞週報』連載初出の底本では不明だった箇所が読解できるようになった。それ故本書の読者は姉妹編である『沈從文「辺城」校勘』を脇に置いて読み進められることを勧めたい。

本書の構成は次の通り。先ず『国聞週報』に連載された「辺城」を底本として用い、本文を掲げる。第一章から第二章までを六―一五段落に分け、段落ごとに語釈をつけ、各行の難解な語、語句、文についての評釈が加えられ、特に難解な文には著者自身の訳が記されている。この部分が本書の核にあたる部分であり、「調査魔」としての著者の本領が遺憾なく発揮されている。さらに結章として沈從文独特のことばを分類・分析する。（１）特別選別語群として一五種挙げてその用法を説明、（２）書面語・方言などの厄介語探索を品詞分類して八種に分けて列挙、（３）各種各様の難点收拾を語順・省略・句読点・独自用法・文構造・病句・補語・誤植・造語・三〇年代用法・文言混入・助動詞など一六種にわけて説明、

(4) 土俗的事物・事象の考察を、地名……串いなど一〇種に分けて収録、(5) 難読性の原因をa-yの二五種に分類。巻末に「辺城」語句索引を付す。全七〇九ページに及ぶ大作である。では、本書のほんの一部を具体的に紹介してみよう。

①九五頁

，把劈好的柴堆到敞坪裏去如寶塔，

好は結果補語。劈好的柴で「ちゃんと割った薪(まき・たきぎ)」。敞坪は「寛敞的場地」として

文の『従文自伝』から例文を引いている。

手抜きした形で同じ例文を引く。他の辞典では見当た

らぬゆえ、沈従文あるいは湘西の用語かもしれない。

し文字の意味から、ひろびろとした平らな土地、という

察しはつく。走や跑のように移動を示さない堆のような

動詞にも、補語の到去をつける言い方が沈従文にはあ

ることを知っておこう。堆は「累積、聚集在一块」

如は動詞、「」のようである。」(以下省略)。

②一七〇頁

，翠翠抿着嘴一句话不説，

抿着嘴について一言。抿を、「口をすぼめる」と訳し、

抿嘴笑の例を「口をすぼめて笑う」とする辞典が多い。

漢詞では抿嘴笑を合口微笑としている。「すぼめる」と

は「つぼめる」と同義であり、壺状に突き出す口の構えを指す。「抿はむしろ咬または撇のように唇を横に引っぱって口を合わせる動作である」陳らしい。つまり、「口を閉じて」あるいは「口を結んで」ほほえむ、というのが妥当ではあるまいか。鐘ヶ江信光氏が「軽く口を合わす」としているのは、「軽く」が余計だが、まだ適切であるといえる(以下省略)。

紙幅の関係で短いフレーズ二例に止めたが、①は標準語なら「堆在」になるところを沈従文は「堆到去」とする例を取り上げている。②はよく見られる表現であるが、確かに「口をすぼめて笑う」はその口の形をして笑うのは不自然であり、「口を結んだまま笑う」ではどうかという著者の訳が示されている。このようにわかりやすい説明ながら、根拠が示され、ネイティブの意見も取り入れ、辞典の訳語の適否をも検討されているため、ついつい引き込まれて読み通してしまう魅力がある。巻末の語句索引は、沈従文の他の作品を読むときにも大いに役立つというまでもなく、他の作品にも広げて行けば、それこそ「沈従文作品語彙辞典」となるだろう。若い世代へのバトンタッチをぜひ期待したいものである。また、作者自身が修正していない特定版本については多い誤植と編集者の勝手な修正(二一七頁)を暴いて粗悪品として

批判し、『沈従文全集』の「辺城」が開明書店版に依拠するといながら、これらの粗悪版本の誤りを正さずそのまま引いている部分があることを指摘して、『全集』編集に対する疑念をも示している（一八六、一九二、二三一頁など）。

敢て本書の問題点を挙げるなら、①第二章第二段落（八三頁）「有出山泉水的意思」の「出山泉水」は杜甫の「佳人詩」に「在山泉水清，出山泉水濁」という典故を引いているのを見落としたために松枝訳も英訳も苦勞し、著者も苦勞されることになったが、中国の文人は唐詩選などは諳んじていて、自由自在に比喩として使うので、見落とすと作者の真意を読みそこなってしまうから恐い。②第十章第十三段落（三八二頁）「還不管風車，不管傢什！」の「風車」は「水車」の誤りではなく、「風車」は唐箕につけられた装置で、風を送りしかなどを吹き飛ばす役目をするものと考えられる。「碾坊」には、脱穀だけでなく、精米するために水車の他に唐箕も備え付けられていたと見るべきだろう。③第十四章第四段落（四六六頁）「駕家中那隻新油船下駛」の「油船」の「油」を「油を塗る」という動詞に解釈するが、評者は「油運搬船」あるいは「油槽船」の意味にとる。本書七五頁にも、「船下行時運桐油青鹽，染色的楮子。」が引かれているし、沈従文著『湘西』で、湘西の物産として第一に挙げるのが桐油であり、

「常德的船」でも「洪江油船」は「下りで三四千桶もの桐油を運ぶ」とある。また、「油を塗る」を表すには、「塗油」や「用鸟油漆过」が使われている。「辺城」では小規模の船だとしても、下りは当地の桐油を運んで、上りは綿花あるいは日用雑貨、嗜好品を運んで来るのであろう。

これだけ大部の労作であるから、少々のは瑕疵は免れまい。大学の紀要に連載されていた当時から、著者の評釈に興味を持ち、途中から校勘一本になったことを残念に思っていた評者にとっては、最初の計画より充実した形で本書が完成されたことに深い敬意を表し、非常に嬉しく思う。本書は蓋し沈従文研究の座右の書として、これからの学徒にとってどれだけのよりどころとなるか計り知れない。

（こじま・ひさよ 明海大学名誉教授）

中国語話者のための日本語教育研究会 第24回研究会

▼日時：12月22日（土）13時00分～17時00分▼会場：東京学芸大学N棟4F 411教室（東京都小金井市貫井北町4-1）▼アクセス：JR国分寺駅北口より徒歩20分 地図 <http://www.u-gakugei.ac.jp/07access/>▼お問合わせ：明海大学応用言語学セミナー運営委員会 ☎ 047-355-5120 FAX 047-350-5504 Email: gsalseminar@meikai.ac.jp URL: <http://www.meikai.ac.jp/>